

都留の野ぼとけ(十二)

石 仏 群

鈴木茂治

野ぼとけは、「石仏」とも「路傍の石造物」ともいわれています。前号まで紹介してきた石造物は、ほとんどが一体だけで、そのあるべき場所に建てられているものが多かったのですが、市内には、そういう独立石仏のほかに、集団で建てられている、言わば野ぼとけの団地のような「石仏群」が、何カ所かに残されています。石仏群は、だいたい馬頭観音の集団が多く、主として旧富士道の路傍や分岐点・村境などに多く残されています。

赤坂石仏群

四日市場の瀬中の集会所の脇か



四日市場・瀬中・赤坂石仏群

ら深田へ抜ける山道があります。これは旧富士道といわれている江戸時代に造られた古い道路です。瀬中からこの路を入ると、すぐ上り坂になっていて、この坂が赤坂で、「赤坂」の地名の起りといわれている坂です。その坂を上りきった所にこの石仏群があります(上写真)。中央の「庚申文字碑」と「道祖神石祠」を囲むようにして「馬頭観音」「大乗妙典廻国供養塔」「水神」など、合計四十八基もの石仏が所せましとばかりに連立しています。道路脇にあるので馬頭観音碑が圧倒的に多いのは当然ですが、この馬頭群の中に、よそにはあまりない馬の名前を刻んだものがいくつあるのが見つかりました。ちょっと珍しいので紹介しますと、一つは明治二十八年四月のもので「鹿毛明麗」とあり、もう一つの太正九年九月のものには「ケイフメート」と競走馬ふうの名前が彫ってあります。ほかに昭和二十四年三月のものには「鹿毛男馬」とだけあって、名前はありません。これらの馬頭観音を見ますと、愛馬の霊を慰める飼主の優しい気持ちが切々と伝わってまいります。



鹿留・古渡・芝草石仏群

芝草石仏群

富士道を富士山めざしてどんどん行くと、鹿留の古渡入口の所に市内最大の石仏群があります(写真下)。ここは古渡と宮下との分岐点で、富士道の一里塚ともいわれて榎が植えられてあったという場所です。この石仏群は、右側は「本地蔵」といわれる舟に乗った「六地藏」、左側は「百番供養塔」を中心に、「馬頭」さんを主とした集団石仏合わせて五十二基ほどが並立しています。この群で特筆すべきは、ここには、他国からの巡礼者が建てた「供養塔」が目につくことです。左側の先端にある「常雲供養塔」には「文化九申(一八二二年)十一月二日、江戸神田」とあります。江戸(東京)神田の人が建てたのか? 常雲が神田の人なのか? これは謎です。

高校総体開催に向けて

相撲の極まり手について

相撲でいう極まり手とは一つの勝負が決定した瞬間、その技が何という技で勝負がついたかの判定につかう技の名前です。

実際に相撲の極まり手を素人が判定するのは難しく、その極まり手の数は七十手にわたって細かく分類されています。

昔は、投げ手十二手・掛け手十二手・そり手十二手・ひねり手十二手の合計四十八手でしたが、その後、寄り切りや押し出しなどの技が細かく分類されて、昭和三十五年から正式に七十手となりました。極まり手のなかにも、その判定

が微妙なあまり、めったに極まり手として発表されないものも数多く、極まり手を正確に判断するのは、極まり手委員と呼ばれる競技役員が決めることになっています。相撲競技を観覧する時、これらの極まり手を少しでも覚えておくと、さらに楽しく観覧することができ

ます。実際には極まり手の判定はウルトラ級に難しいため、各競技中にほとんど出ない幻の極まり手もあります。今回は、そういった幻の技を紹介します。

社会教育課高校総体事務局

三所攻め(みところぎめ)



相手の右足(左足)を足技で攻め、残りの左足(右足)を手ですくい、相手の胸に頭を突きつけて仰向けに倒す技。

かわず掛け(かわずかけ)



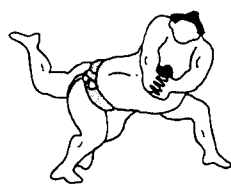
相手が右の外掛けで攻めてきたら、逆に左から内掛けにからめ、左手で相手の首を巻き、体を後ろにそらしながら左足をはね上げて倒す技。

呼び戻し(よびもどし)



相手の体をいったん呼び込み、反動をつけ、差し手を前に突きつけて倒す技。

合掌ひねり(がっしょうひねり)



両手で相手の頭をつかみ、右か左にひねり倒す技。別名とっくり投げ。